

RadioDays



ラジオデイズ

声には、
人の体温があり物語がある

月刊「ラジオデイズ」7月号 (通巻第26号)

2009年6月28日発行

【発行人】赤塚祐一郎

【編集人】大森美知子

【発行所】株式会社ラジオカフェ

東京都新宿区新宿1-6-5 シガラキビル6F

Email: info@radiodays.jp FAX: 03-5356-8281

http://www.radiodays.jp

7

July Edition

2009, vol.26

Free of charge

この人の声が聴きたい◎7月

小坂忠さん (シンガーソングライター)

放浪からほうろうへの ターニングポイント

マレー・ラーナー監督の「フェスティヴァル」は、六〇年代初頭のニューポートフォークフェスティバルのドキュメンタリー映像である。ジョン・バエズ、ボブ・ディラン、ピーター・ポール・アンド・マリーらの貴重な演奏や語りは、音楽が世界を変えると信じられていた時代の雰囲気をよく伝えている。

ディランの演奏を聴いていたソバカス顔の少年が興奮してこう言う。

「みんなが放浪に憧れている。ディランは放浪者じゃないけど、そんなイメージを持っているんだ」

小坂忠さんは、一九六九年に細野晴臣さんと松本隆さんと伝説の「エイプリルフール」を結成したが、短期間のバンド活動の後、ロックミュージカル「ヘアー」に転じた。歴史にイフはないけれど、ヴォーカリストの小坂さんがそのまま残っていれば、「はっぴいえんど」は別のかたちのグループになっていた可能性がある。

「ヘアー」はマリファナ事件で頓挫し、音楽に戻った小坂さんは、最初のソロアルバム『ありがとう』(71)を発表。翌年には、狭山の米軍ハウスに居を構えて、駒沢裕城さんや林立夫さんとともに「フォージョーハーフ」を結成する。『もつともつ』(72)、『はずかしそうに』(73)をリリースの後、一九七五年に紛れもない名盤『ほうろう』を発表。このアルバムには、小坂さんのたつての希望で、米



軍ハウスの隣人でもあった細野さんがプロデュースに参加している。

ラジオデイズで収録した「ミュージックトーク」で、小坂さんは『ほうろう』が自分のターニングポイントであったことを認めながら、この時期のツアーが実はかなり辛いものであったと告白している。

一九七五年は七〇年代のターニングポイントでもあった。サイゴンが陥落してベトナム戦争が終結し、元首相佐藤栄作が死去、中核派の本多書記長が内ゲバ殺された。マイクロソフトが創業したのもこの年である。

ターニングポイントとは、折り返し点だが、マラソンのようにも来た道を引き返せばいいわけではない。小坂さんは次の目標へ向かう転回点で、行くべき道を選びかねていたらしい。六〇年代から七〇年代半ばまで続いた「放浪」の季節には暗黙の裡に共有された方向があった。しかし、七五年に小坂忠というミュージシャンが余儀なくされたのは、恐らく何もあてのない「ほうろう」だったに違いない。

ツアー終了後、小坂さんはお嬢さんの事故を契機にキリスト教に入信し、コンテンポラリー・クリスチャン・ミュージックの道を歩み出す。ロックがビジネスになっていく中で、もうひとつの選択肢を選んだヴォーカリストは、人々に語りかけ、神を讃える歌に向かった。次の放浪を開始したのである。

(ラジオデイズ・プロデューサー 菊地史彦)

ラジオデイズは、文芸・対話・話芸を三本の柱に、声のもつ魅力に特化した音声コンテンツを制作し、ダウンロード販売するWebサイトです。

飄逸で含蓄のある随筆、瑞々しい感性の横溢する詩歌や小説の朗読、個性的な対話者たちの真摯な言葉の応酬から生まれる知的交歓、粋と人情の落語や講談などなど、大人のお楽しみにたえる魅力的なコンテンツが満載です。

ただいま入会随時受付中!

会員(年会費無料)になられると、期間限定の無料コンテンツがお楽しみいただけます。サイトでは、声の魅力を凝縮したコンテンツのすべてを試聴できるほか、演者のプロフィールやコラムなど読み応えも十分です。どうぞお立ち寄りを!

<http://www.radiodays.jp>

〈対話・放談〉

人気メルマガでおなじみ、田中宇氏の毎月ニュース解説「世界はこう読め!」、人気コラムニスト小田嶋隆氏が世相を斬る「グラフィカルトーク」、大貫妙子さんと加藤和彦さんなど、ミュージシャンに話を伺う「Music Talk」、ラジオ番組「ラジオの街で逢いましよう」の番外編「ラジオ街ブラス」が好評。さらに、慶應丸の内キャンパス(慶應MCC)開催の「タ学」のなかから、各分野の第一線で活躍する研究者・経営者・文化人・ジャーナリスト等による講演を厳選してお届けしています。

〈文芸〉

作家の関川夏央さん、小沢昭一さん、詩人の清水哲男さんなど多彩な解説者を迎えた「声のエッセイ」コレクションが評判。また、「声の詩集」シリーズからは、女優馬九せつこさんの朗読、詩人の正津勉氏がナビゲートする「詩人の愛」I・IIをお届け中。女優有馬稲子さん朗読の「水仙」も登場。さらに本邦初となる落語家・入船亭扇辰師、柳家三三師朗読による江戸弁で聞く落語調「ゴリ」外巻「鼻」も発売。詩人の小池昌代さんのコラム「言問い小路」も好評連載中。

〈話芸〉

ラジオデイズ収録の新鮮なオリジナル音源二百六十本余をお届け中。時代に磨かれた古典を自家楽館中に現代に演じきる噺家たち。そして、時代の流れから湧き出た、かつて語られたことのない新作に筆を削る噺家たち。ライブ音源だけに一期一会の噺に出会えます。不定期ですがラジオデイズイチオシの噺家さんの演目を無料ダウンロードにて提供していきますので、毎日覗きにきてみてください。まずは、試聴ボタンを。

オリンパスモビー寄席

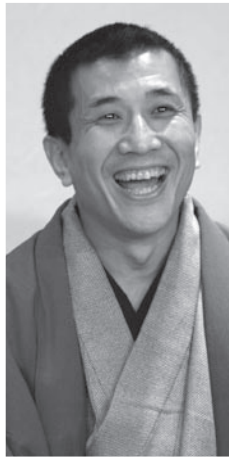
【日時】7月14日(火)午後6時45分開演(午後6時15分開場)
【場所】お江戸日本橋亭

すべての落語は新作として生まれ、数多くの噺家によって高座にかけられ、生き残ったものが古典になる……。それを自家葉籠中に演じる現代の噺家たち！ 人情の機微に触れ、免疫力増進の涙と笑いの宝庫、至福の話芸の真剣勝負。

三遊亭兼好

(さんゆうてい・けんこう)

三遊亭好楽門下。平成一四年二ツ目昇進。二十年、真打昇進とともに兼好と改名。骨格は変えずに、現代的な感性で演じる古典が評判。また、独自の新作落語も手がけるなど、「落語界の革命児」の異名を持つ、研究心旺盛な理論派。一九九年にっかん飛切落語会奨励賞受賞など、受賞歴多数。



春風亭一之輔

(しゅんぷうてい・いちのすけ)

春風亭一朝門下。平成一六年、二ツ目昇進。二ツ目ながら語り口に定評があり、会を開くと多くのファンが駆けつける。噺はもちろんのこと、素朴な話題から繰り広げられるマクラも面白く、目の離せない存在。平成二十年、第四回東西若手落語家コンペティション優勝。



明烏い話

連載第27回 本田久作



小島政二郎は円喬の芸を誉めて、あの人が喋っていると高座から円喬の姿が消えた、と評した。漱石は『三四郎』での三代目小さんを誉めるあの有名なくだりで、小さんの演ずる人物から、いくら小さんを隠したって、人物は活発々に躍動するばかりだ、と書いている。小島と漱石の言わんとするところは二人とも同じで、彼らは円喬や小さんのリアリズムを絶賛している。さらに遡れば円朝も、客の顔が分からないほど噺の中の人物になりきれと弟子に小言を言っているぐらいだから、自身もまた同じ芸を目指していたのだろう。落語におけるこうしたリアリズムの伝統はおそらく芝居噺から来ていると私は想像している。当時の芝居噺とは要するにお芝居(つまり歌舞伎)をたつた一人で演じるものだ。そうなるとうとうでも登場人物の一人づつをきれいに演じ分けなければならない。漱石はこうしたリアリズムの流れを汲む小さんの芸を誉めつつ初代の円遊を評して、円遊の扮した太鼓持ちは太鼓持ちになった円遊だから面白くとも書いてある。だがその一方で、円遊よりも小さんの方が上だと評価を下している。小さん・円喬と円遊のどちらが現代の落語

に近いかと言えば、これはもう間違いなく円遊の方である。私たちは噺家が演じる熊さんや八つあんの台詞を聞きながら、その裏に隠れている噺家その人の声も同時に聞いている。噺にはその噺を演じている噺家自身の姿が見えてこなくてはならない。だからこそ、同じ噺を違う噺家によって聞き比べる楽しみが生まれてくる。いささか極端に言えば、噺家が高座から消えるほどリアリズムに徹したら、噺家が上手くなればなるほど同じ噺は誰がやっても同じということになってしまうはずだ。

私は中学生の時はじめて円生の落語を聞いた。生ではなく、ラジオで。ネタは『栗橋宿』だったと思うが、その辺りの記憶は曖昧である。ただ、円生のあまりの上手さに腰を抜かすほど驚いたことだけははっきりと覚えている。当時(昭和五十年前後)私が暮らしていた大阪にはこういう噺家はいなかった。私は円生の技術に感嘆しながら、なんとという無駄な上手さだろう、と呆れた。

円生の演じる女将さんやその亭主は、まさにその女将さんそのものであり、またその亭主そのものであった。小島政二郎の言い方を借りるのであれば、その時円生の姿が噺から消えていたのである。しかし、それでは落語ではなく放送劇ではないか、と当時中学生だった私は思った。登場人物をあくまでリアリズムに一人づつ演じ分けることを何よりも重要視するのであれば、一人で複数の人間を演じるという無理をせず、複数の芸人が複数の人間を演じる方が合理的である。少なくともその時私が聞いたラジオという媒体を考えれば、その方が自然だろう。普通なら複数の人間でなければできないことをたつた一人でやってみせるからこそすごいのだと自慢するのであ

れば、それは芸でも曲芸だ。私は落語に軽業的なものを求めていないからこそ、この時間いた円生に反感を抱いた。そして後年その気持ちが一転して円生の芸にはまるようになったのは、円生の噺に出てくる登場人物の裏側に常に円生の声が流れているのがよくよく聞こえるようになったからである。

●ほんた、きょうざく

一九六〇年大阪府生、落語作家。「二〇二年の「仏の遊」」が国立演芸場台本募集佳作受賞以来、落語、漫才など新作台本募集の賞を毎年総ナメの業界巨匠の新進作家。主な受賞作「玉手箱」(国立演芸場台本募集優秀作)、「唄の葬式」(按摩の夢)、「幽霊番長」(いずれも落語協会優秀賞)など

私の譚大ばなし 貳拾六

立川談四樓

巻 『小町』

昭和四十五年秋、東芝ホールにおける初高座でした。トチった拳句に転倒するというとんでもないもので、今でも夢に見ます。でも、かけがえのない体験です。

貳 『三年目』

円生という人は怪談噺で演りましたが、私は女心溢れる幽霊の可愛らしさをデフォルメして描いています。花魁にする長屋のカミさんにする、総じて女の人が出てくる噺が好きなんです。ときに健気で、ときに逞しく、女性のほうがバイタリティがありますから。

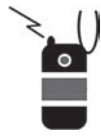
参 『長屋の富』

新作ながらも古典の二オイのする「創作古典」というかたちで作った噺です。数ある古典の富クジものの中で「水屋の富」もクジに当たった後の話ですが、私の噺ではもっと登場人物が多く長屋中を席捲しながら展開していきます。先人の遺産を食い潰すだけでは落語の将来はありません。近年創作の重要さを感し、さらに挑戦したいと思っています。

こみちが行けば

女流二ツ目の修行日乗②

柳亭こみち



師匠の一人息子・通称秀君は、私の入門時、小学4年生。なにかと「愛ちゃん! (こみち本名)」と呼んで、とてもなついてくれた。

修業時代は「家のわからないことは僕にきいて!」「ママがこう言ってたよ」と家事のコツを教えてください。得意技は乗り物に運賃を払わずに乗ること。小柄な彼は、私が掃除機をかけているとよく背中に乗ってきた。背負ったまま掃除機をかけていると「愛ちゃんも大変だねえ」と、誠に愉快。師匠の小言に涙を流せば「まあまあそんなに自分を責めないで」。一緒にアニメの主題歌を歌い、私の似顔絵を生態観察記付きで描き、学校の避難訓練に迎えに行くと、体育座りの列の中、立ち上がって手を振ってくれた。

師匠宅での初めての大幅日。夜も更けた頃「愛ちゃん、年越し蕎麦どうするの?」と心配している。おかみさんが「愛ちゃんも家で食べて行くんだよ」と応えると「ホッ。よかった!」。

かわいかった。
その秀君も今や高校2年生、青春真っ只中だ。身長はいつの間にか追い越され、髪や眉毛も生え、鞆も傘も大人びた物を所有。パンツと靴下は、もはや師匠のものとの見分けがつかない。友達が遊びに来れば大きな靴が玄関を埋め尽くし、青年の熱気と低響く笑い声。これで彼女でもできたら、もっと淋しいんだろうなあ……。

●りょうていこみち

社会人生活を経て、平成15年柳亭燕路に入門。18年11月二ツ目昇進。趣味は長唄。特技は日本舞踊。五妻流名取(五妻香美)。落語協会野球部。チーム所属。

味な脇役・話芸のきまり文句

連載第26回

才能



松井高志

落語に出てくる諺で、人の生まれながらの才能をいうものといえは、「子ほめ」などに引用される、

梅檀は双葉より芳し

がすぐ頭に浮かぶ。大成する人は子供の頃からどこか他の子と違うものだ、のたとえ。「実のなる木は花から知れる」(こちらは「雛鏝」あたりによく出る)も似たような諺だ。では我々凡人については落語などどう言われているか。

一升枀は一升(あるいは「一升袋は一升」)

これは「福祿寿」などの人情噺によく出てくる。一升の枀には一升しか入らぬ。自分の器以上の仕事はできない。己の器量を弁えて世を渡れ、という、いかにもリアリステックで心学的な世知である。

落語や講談にはこういう現実的な「教訓」がときどきぬつと顔を出す。話芸を娯楽とみるか、「浮世学問」の一種とみるかで、こう

いう教訓のありがたみも客によってずいぶん違ってくるだろう。ところで、凡人の生涯は才人のそれよりはずっと気楽である。才人はひたすら己の才能をたのみに生きねばならないが、それでも、

いくら名人でも他人が見出しにくくなくって世の中に打って出ることが出来ない(落語「金玉医者」より)

のだ。この「名言」、もうちょつと格調を加えれば、

伯樂有りて後千里の馬あり、千里の馬は常にあれども伯樂は常になし

(多くの落語・講談の元ネタになっている江戸時代の随筆「窓のすさみ」第一より)

といった表現になる。要するに時を得なければ才能があっても宝の持ち腐れになるというのだ。実に厳しい。また運良く世に出たとしても、才人はしばしばエキセントリックであるから、世間の常識から逸脱しやすい。孤独に耐える強靱さが必要だということになる。

千里を走る馬には何か癖がある

と、「文七元結」で五代目古今亭志ん生も言っている。才人や美人は遠くから見ただけの方が無難なのかもしれない。

●まい・たかし

一九六〇年愛知県生。月刊誌編集者を経てフリーライター。著書に『一生に効く! 話芸のきまり文句』(平凡社新書)、『テンドク』(難読漢字自習帳)(バジリコ)『江戸に学ぶビジネスの極意』(アスペクト)など。話芸「きまり文句」辞典」サイトは<http://vageitdon.coology+info.com/>

「声」と「語り」をダウンロード!

今が旬の音声コンテンツ満載

<http://www.radiodays.jp>

歯に衣着せぬ発言で世相を斬る痛快トーク

●「田中宇の世界はこう読め!」

●「小田嶋隆のグラフィカルトーク」

ミュージシャン・ロングインタビュ

●「Music Talk 大貫妙子の世界」



温もりと味のある声のエッセイ/新鮮な詩の物語り

●詩人の心の原風景(谷川俊太郎)

●「水仙」瀬戸内寂聴(朗読・有馬稲子)

●詩人の愛 金子みすゞ、中原中也、村山槐多ほか(鳥丸せつ) / 正津勉



本邦初!世界初! 江戸弁で聴く落語「ゴロリの魅力」

●「外套」(I-III) 入船亭扇辰

●「鼻」(I-II) 柳家三三



面白くて物凄、当世落語家の斬がいつぱい
三遊亭円丈、昔昔亭桃太郎、五街道雲助、古今亭志ん五、柳家小ゑん、瀧川鯉昇、柳家喜多八、柳亭市馬、桂平治、柳家喬太郎、三遊亭白鳥、橋家文左衛門、三遊亭遊雀、入船亭扇辰、古今亭菊之丞……etc.

ラジオデイズサイトにようこそ!

※ご購入や無料ダウンロードには会員登録(無料)が必要です。



第27回オリンパスモビー寄席

春風亭百栄独演会

【会場】お江戸日本橋亭

【本席料】2800円（前売2500円）

【時間】午後6時45分開演（午後6時15分開場）

●8月18日(火)

春風亭百栄・「ゲスト」米粒写経

第28回オリンパスモビー寄席

桃月庵白酒独演会

【会場】お江戸日本橋亭

【本席料】2800円（前売2500円）

【時間】午後6時45分開演（午後6時15分開場）

●9月15日(火)

桃月庵白酒・「ゲスト」二遊亭天どん

※「予約申込受付中」ラジオデイズURL <http://radiodays.jp>もしくは、予約受付専用電話(011-3341-1130)より、先着順です。

ラジオの街で逢いましょう

ラジオデイズでは、声と語りの魅力を求めて、深夜のラジオ番組も制作・放送しています。

お相手は、ラジオデイズプロデューサーの平川克美、菊地史彦、伊藤博、大森美知子が務めます。これまでの放送分は、ラジオデイズサイトにストリーミング放送中。さらに、ポッドキャストでも配信中です。どうぞ真夜中の語らいに耳を傾けてみてください。

<http://www.radiodays.jp>
インターFM毎週日曜日の深夜23時から23時半まで。

今後の放送予定（深夜のお客様）

6月28日 平野悠（ロフトプロジェクト代表）

7月5日 カルメン・マキ（シンガー）

12日 柳家三三（落語家）

19日 姜尚中（政治学者）（予定）

26日 八木幹夫（詩人）

水無月の落語会

第二十五回オリンパスシンクラー寄席（六月

一七日）は、五街道雲助独演会。開口一番はお馴染み寄席に咲いた一輪の花、春風亭ぼっぼさんが「つる」で「ご機嫌を伺います」。

さて雲助師匠が登場。ネタはうれしや「品川心中」。衣替えの紋目を前に金の工面がでない品川の宿場女郎おそめ、いっそ死のうと思うが金がなくて死んだと言われるのもしやくだと身寄りのない貸本屋の金蔵と心中を企て、嫌がる男を品川の海へ突き落とすが……。師匠の軽みと滑稽味が笑いを誘います。

続いて本日のゲスト、鈴々舎わか馬さんが高座へ。ネタは法螺唄の定番「弥次郎」。北海道に行ってきたとご隠居の家に来た弥次郎、べらべらとウソ話を並べていく。ウソと知りつつご隠居も楽しそう。ほんわかとして乗りがいいわか馬さんが詐欺師に見えてくる。芸の力に磨きがかかってきましたな。

三遊亭円丈
本田久作
高橋源一郎
小池昌代
養老孟司
内田樹



三遊亭円丈



本田久作



高橋源一郎



小池昌代



wakaba

kumosuke

(ラジオデイズ寺和尚)

仲入り後は、再び登場の雲助師匠。唄はまも大ネタ「らくだ」。先程の滑稽味から一転、今度は凄みの利いた師匠の得意技を披露してくれました。長屋の嫌われ者らくだが河豚にあたって死んでいた。たまたま訪ねてきた兄貴分が、通りかかった屑屋を捕まえ、長屋の月番や大家のところに吊いの準備の使いに出す。落語には珍しく悪い奴が主人公、人のいい屑屋が振り回されているが、酒が入ると人も役どころも変わる。その展開の妙に観客一同大満足。いつにない大熱演に雲助師匠の芸がひとすじの汗となって光る。今夜のお客様は幸せ者でしたね。

「声」と「語り」をダウンロード!
今が旬の音声コンテンツ満載
<http://www.radiodays.jp>

今最もブッキング困難な役者を揃えた特別対談。絶妙な話芸と目から鱗の文化対談をお届けします。

●戦後落語論
新作落語の旗手、そして教祖的存在である三遊亭円丈に、新進の落語作家本田久作がからむ。落語ファン待望の新作落語黎明期の真相話が炸裂。

●戦後詩人論
戦後作家の中心的存在であり鋭利な批評家でもある高橋源一郎が、生粋の詩人にして川端康成賞の小説家でもある小池昌代と現代詩について話し合う。

●戦後マンガ家論
脳生理学者であり京都漫画ミュージアム館長でもある養老孟司と小林秀雄賞受賞の現代思想家内田樹。マンガに一家言あるこのふたりが存分に語り合う。

そのほか、面白くて物凄、朗読や落語がいっぱいです。ラジオデイズサイトによるこそ！
※ご購入や無料ダウンロードには会員登録（無料）が必要です。

「オリンパスモビー寄席」携帯用特別コンテンツ

モビー寄席特別コンテンツでは、モビー寄席やラジオデイズ落語会にご出演いただいた演者さんの情報や音源、最新のラジオデイズイベント情報が携帯電話からお楽しみいただけます。

バーコードで簡単アクセス!

左のQRコードを携帯のカメラで読み取り、メールを立ち上げて撮影写真を添付し送信。
※ドメイン指定受信の設定をされている方は、mobe.jpを追加してください。

月刊ラジオデイズ各号の1ページ目『この人の声が聴きたい』の丸抜き写真、見開きページの落語家さんのプロフィール写真を撮影、メールに添付して送信すると、アクセス先URLが記載されたメールが返信されてきます。

Mobee (モビー) とは?
オリンパス(株)とホスティング・アンド・セキュリティ・インクスの共同開発による、携帯サイト作成ツールと先進の画像認識技術によるサイトアクセス方法を月あたり263円~という低価格でご利用いただける携帯サイト作成サービスです。

個人の方から法人のお客様まで自分専用の携帯サイトを簡単に開設することができます。用途に応じて、クーポン作成やメルマガ配信などのプランもご用意しました。お申し込みは、PCから<http://pdh.mobe.jp>にアクセス!

ラジオデイズの窓から

通勤路では梅雨の季節を代表する花、紫陽花が見ごろをむかえています。どんよりとした天気が続く、沈みがちな気分を青や淡い紫色の花々が元気づけてくれます。

「ラジオデイズ」では、ほんわか癒し系落語家、瀧川鯉昇師匠の私生活にまで迫った新連載がスタート。他にも続々登場する新作品がサイトに彩りをそえています。梅雨を快適に乗り切るためにも、ぜひお立ち寄りな。